

# 至誠

明治神宮武道場  
至誠館 館長 荒谷卓  
その十五 伝統精神

今回は、「伝統精神の継承」ということについて話してみたい。「伝統精神の継承」とは、個人では達成できない大きな目標を、世代を超えた意志の継承という長期的な努力の積み重ねにより成し遂げようとするものだ。

それは、先達の思い描いた理想や理念に賛同し、時代を越えてその遺志を引き継いでいくことで、歴史を貫く柱を打ち立てることになる。

それによつて、二世代では不可能な理想の実現を時間的集団の事業として実現し、それをさらに維持・発展させることを、日本人は価値あるものと見なしてきた。

この視点からは、個々の人間がその一生に自分のためにどれだけのことを成し遂げたのか、という利己的成果は、およそ文化社会には

あるまじき極めて低俗なものともなされる。

そのような利己的な目的で人生を無為に終わらせるのではなく、社会に生きる人間として、同じ時代に生きる人々との絆や融和だけではなく、過去や将来、即ち祖先や子孫との心と意志のつながりをも大事にし、時と空間をまたぐ無窮の大事業にどのように貢献したかという歴史的役割こそ価値があるものとみなすのだ。歴史的役割とは、一人の行為が歴史を通じ多くの人人に貢献するという不朽の利他的使命を為しえたということである。

現代社会では、個人を尊重するという美名の下、人間を社会と歴史から分断し孤立化させ弱体化させている。組織から分断化された個人は、

れば、夢と希望を歴史的共同作業として実現できるという喜びを実感させることが有効なる問題解決の道であろう。

幸い、我々日本人は、神武天皇の建国以来「八紘為宇」、即ち、「天下をひとつの家と為そう」という理念を天皇陛下を中心に継承してきた。

現代では「おもてなし」や「心遣い」とか「絆」とかいわれているものも、「八紘為宇」の一端で、日本が世界に誇る生きた道義主義文化である。

我々日本国民にとつて、人々の安寧を祈る天皇陛下とともに、建国の理想を日々実践（為）することが伝統精神の継承の核心なのだ。

さらには、国内のみならず、すでに世界の人々とも力を合わせて「八紘為宇」の理想を広く世界に及ぼし、人々が家族のように暮らす、よりよい世界を創ることに貢献することを目標とすべきだ。

そうすれば、何時の時代でも国民一人ひとりが「八紘為宇」という歴史的大事業の端を担うことになる。人々の横の繋がりは、日本国民はもとより世界の人々へと広がり、縦の繋がりは、過去の総ての経験

既存権力に対抗するにはあまりにもひ弱な存在となり、生涯にわたって助け合える仲間の不在などから、常にストレス下におかれる。そして遂には精神を病み、あるいは絶望し、人知れず生を終えるか、時として深刻な社会問題を引き起こしている。

より重大なのは、歴史から分断された個人の存在である。例えば、日本史は今や選択科目と化し、自分が何処から来たのかというルーツを知る必要性を否定しているわけだが、日本史を選択したところで、自分の祖先の歴史を第三者のように冷たく観察するだけである。これは、自分の存在も子孫から同様に扱われることを意味している。つまり、自分が生きていたということが死とともに跡形もなく消え去

意義あるものとして将来へ結ぶ。時代を超えて多くの人々が一体となつて、よりよい世界の創造に関わる喜びを共有することになるのだ。

自然との共生という言葉をよく耳にするが、自然の中で、総てを一体的に包み込んでいるものは「時」である。宇宙創元以来、総てのものが「時」の流れの内に統一的に係わりをもつて営まれていたのだ。

すなわち、「時」は、自然の総てに関連と統一性を与え、休むことのない新陳代謝によつて成長を促す中核的役割を担っている。

日本の神話で、「橋」は、同じ時のなかの空間的繋がりをあらわし、「柱」は、過去から未来への時の繋がりをあらわしている。

神様を数えるときに「ひと柱」「ふた柱」と数えるのは、神様が時を経て変わらぬ価値を御示しになつてからであろう。

そして、神道には、時の中心という考えがあつて、それを「中今（なかな）いま」とよぶ。宇宙の創元から無窮の未来の時の中央が「今」という考えだ。過去の出来事に意義を持たせ、将来を形成する「今」に「精」杯の努力を惜しまないということだろう。「今」を無駄にするというこ

るということだ。この発想は、子供は父と母とは独立した人権を有する存在であるという人権思想の上に成り立っている。最近では、お墓も一人ひとり別々のマンション式のものに分譲されているが、これは、死後は親子でさえ心の繋がりを完全に断ち切られる様を呈している悲しい事実である。

人生のあらゆる問題を相互に相談し助け合う間柄の共同体が崩壊し、合理的契約によつて人間関係を律する法治主義社会は、この傾向を益々加速している。

こうした社会を変えるため唯一国民に与えられている国民の政治行為も、「選挙で一票を投じたところで何も変わらない」。「どの政党の誰が政権についたところで根本問題は解決しない」等といったよう

とは、人類史のみならず自然史の過去の営みと努力を無駄にし、子供たち子々孫々の未来を破壊することにつながる。

例えば、私が学ぶ鹿島の太刀は、神話以来今日まで千年以上にわたつて多くの人々に教え伝えられてきている。この厳然たる事実に向面するだけで、先人先達の崇高なる精神の継承と実践の上に今があることを覚え、謙虚にならざるを得ない。

鹿島の太刀の歴史は、中臣鎌足をして大化の改新を為し、国井宗家は、南朝の臣として後村上天皇、長慶天皇の守護に任じ、北畠顕家、卿に従い足利軍を打ち破るなど、文字通り天孫守護の神武の継承である。単なる武芸の伝承ではない。

私は現在、これを教え伝えるべき立場の末端を担っているが、次世代に何を伝えるべきかを突き詰めていけばいくほど、鹿島の太刀を創元し発展させてきた先達の理念と実績に思いを馳せざるを得なくなる。

現代の社会は、多くの人々に普及した思想や理論としてシステムに普遍的価値を見出そうとする傾向にある。多くの人々に認められ普及したものに価値があるというの

ならば、同じ時代の政治力学的普及や商業的流行の広がり以上に、異なる時代をまたいで伝統として普及している精神文化あるいは技術造詣文化の価値をもっと正当に評価すべきである。

それらは、異なる社会制度の時代の政治力学を経てもおおかつ、価値あるものとして継承されてきたものなのだ。

つまり、よほど確かな価値観を有していなければ、千年以上に渡る長い年月を、継承されることはないはずだ。

時代を越えた理想や理念の共有すなわち「伝統精神の継承」は、伝統的文化国家の本来の生存理由であると言っても過言でないほど重要な要素であり、そもそも、それがなければ伝統的文化国家としての国家運営は成立しないはずである。

それをやめて、契約的集団としての国民国家を新たに創りなおすというのであれば、それは本来、国民を上げての一大決議が必要とされるべきところであり、一般的に内乱があつてしかるべき重大事である。日本の戦後史は、この大矛盾を抱え

て現在に至っている。ここに憲法論議の本質的問題がある。

以前も紹介したが、明治の初期、日本では、外交をめぐって国家運営の基本的思想の対決があつた。欧米と同じように合理主義的立場から

国勢の進展を主張する大久保らと、伝統的道義主義を貫こうとする西郷らの対立である。結果は、大久保ら西洋合理主義を主張する側が勝利し政権を独占するに至つた。それは必然的に大東亜戦争へと行き着くこととなる。

他方、西郷の伝統的道義思想を継承する頭山満等は、アジアの同胞に「大アジア主義」を呼びかけ民族自決（被殖民状態からの自立）を支援する在野での活動を展開した。主権や領土を振りかざす外交姿勢ではなく、自立した民族が相互に敬意を持つて共栄共存する『八紘為宇』の外交姿勢を主張し実行したのである。

現代では、国際社会での価値観の共有については議論が交わされるその具体化も進められてはいるが、その手段が軍事力主体から経済力主体へと変わつて、強調的手法へと変

化はしているものの、競争原理に基づく価値観であることは戦前と変わっていない。競争原理は必然的に格差を拡大し、最終的には、勝者と敗者を確定することになるであろう。

そのような世界は、日本人が建国以来理想として探求してきた『八紘為宇』とは正反対のものである。

いや、『八紘為宇』は、日本人だけではなく、本来総ての民族が理想としてもつていた普遍的価値観ともいえるが、それぞれの民族において「継承」されていた「絆」によって結ばれていた社会は、競争原理の政治力学の中で崩壊してしまつたか、あるいは、崩壊の危機に瀕しているのだ。

人々が家族のように暮らせるよりよい世界を構築するために、時代を越えて意志を継承し、社会の抱える問題を解決しようと試みることは、人間だからこぞできる崇高な挑戦である。

もちろん、世界がグローバル化した現代、『八紘為宇』の精神作興は、国際社会の理解と賛同なくして不

可能である。そしてまた、日本文化の価値を日本人が国際社会に発信することは大変難しい面がある。

しかし、幸いなことに、私が館長として指導している明治神宮至誠館には、武道と神道を通じた日本文化を主体的積極的に探求し世界に広めてくれる海外門人が年々増え続けている。彼らは、「神道の精神と伝統文化に根ざした日本の武道精神は、世界に共通して存在するはずの、伝統とエートスをみいだすうえで、今日の世界的人類遺産のなかでも極めて価値あるもののひとつである」として、世界の運命を正しく豊かな道へと導くため、至誠館武道を通じて民族間の理解と親和を強化する事に努めようと考えているのだ。

この機運を活用し、日本の伝統精神に根を下ろした、強くて大きな大和魂を鍛練し、現代において、真に幸福な社会、真に豊かな国家、そして真に平和な世界をつくる任に当たる人材を国内外に育むことこそ、現代における『八紘為宇』の実践であると考え努力を惜しまないものである。